【説明文】

◇今回は説明文を読みます。説明文とは、ある題材について知識をもっている筆者が、知識をもたない読者に対してわかりやすく説明することを目的としたものです。

◆接続語に注意して読もう

接続語は、言葉と言葉、文と文、段落と段落をつなぎ合わせるための言葉ですが、その働きや意味を理解していれば、次にくる文章内容の予測を容易にしてくれます。

・順接　前のことがらが原因や理由を表し、後のことがらがその結果や結論を表すという関係で結ばれる。

例「だから・したがって・それで・そのため」など

・逆接　前のことがらと、後のことがらが相反する内容を表すという関係で結ばれる。

例「しかし・だが・けれども・ところが・でも」など

・並立、累加　前のことがらと、後のことがらとを並べる（＝並立）、あるいは前のことがらに、後のことがらを付け加える（＝累加）という関係で結ばれる。

例「また・ならびに・および・さらに・しかも」など

・説明、補足　前のことがらを、後のことがらで説明、補足するという関係で結ばれる。

例「つまり・たとえば・なぜなら・ただし・なお」など

・選択、対比　前のことがらと、後のことがらのどちらかを選択する、あるいは、前のことがらと、後のことがらとを比較するという関係で結ばれる。

例「あるいは・または・もしくは・それとも」など

・転換　前のことがらから、後のことがらへと話題を変えるという関係で結ばれる。

例「ところで・それでは・さて・では」など

問題

◇次の説明文を読んで、あとの問いに答えなさい。

最近は普通の読者はもちろん、詩歌なども黙読する人が多く、音の持つカンセイを身体で味わう機会が少なくなってきています。

かつて日本では、先生が言ったことを復唱することが学習の基本でした。

寺子屋では、師が「吾十有五にして」と言ったら子どもたち（寺子）が「吾十有五にして」と復唱する。続けて師が「学に志す」と言うと、また子どもたちが「学に志す」と復唱する。

こうした学習方法は単に言葉を繰り返すだけのものではありません。先生がピシッとセスジを伸ばし孔子の言葉を述べる、これは孔子の精神の体現に他ならないからです。復唱する子どもたちは、先生の言葉だけを真似するわけではありません。同時に姿勢や発声も先生の真似をします。[A]、寺子屋で行われていた「音読の復唱」という学習方法は、孔子の精神性を身体性を通じて子どもたちに乗り移らせていたのです。

この教育方法には想像以上の高い学習効果があります。

杉本鉞子さんの『武士の娘』という著書の中に、次のようなエピソードがあります。

杉本さんの家には、『論語』を教えてくれる女性の先生が来ていました。ある日のことです。自分がちょっと姿勢を崩したら、先生は「今日はこれでやめにしましょう」と言って帰ってしまわれた。先生にそう言われて、彼女は非常に恥ずかしく、情けない思いになり、(1)一人で部屋に戻って泣いたというのです。

なぜ先生は帰ってしまわれたのか、そしてなぜ彼女がそれを泣くほど恥じたのかおわかりでしょうか。

実は先生は、彼女が姿勢を崩したのを見て、学ぶ準備ができていないということだと判断したのです。そして、杉本さんもそれがわかったので自らを恥じたのです。

著者の杉本さんは一八七三年（明治六年）生まれ。旧越後長岡藩の家老の家に生まれたため、武士の娘として厳しい教育を受けていました。だからこそ、自分の何がいけなかったのか、すぐに悟ることができたのだと思います。さすが武士の娘です。

このように、かつての日本では、整った身体に言葉を通して精神を伝授するという、「身体と言葉と精神」の三つが一体化した教育が行われていました。

なぜ日本ではこのような教育方法が行われていたのでしょう。一つには、東洋の特性ということが言えると思います。東洋には「体を整えることによって精神を整える」という伝統が、インド、中国、日本と綿々と続いています。

西洋にも身体と精神を結びつける思想がないわけではないのですが、東洋ほど色濃いものはありません。むしろ西洋においては、知的に高度であるということと、姿勢を整えて礼儀正しくするということは直結していないと言えます。

古代ギリシャの哲学者プラトン（前四二七～前三四七）の『饗宴』などを読むと、当時のギリシャ人は、寝っ転がったり、酒を飲んだり、あるいはお風呂に入ったりと、自由にリラックスした(6)ジョウタイで、非常に高度で知的な思考をし、議論をしていたことがわかります。

西洋では、最も大切なのは議論の内容に集中することなので、相手が頬杖をついているようが何をしていようが、姿勢で「君、それは自分に対して失礼じゃないか」と言う人はいないのです。しかし、礼節を重んじる東洋においては、[B]臨むことが非常に重要なことなのです。これは、東洋と西洋の大きな違いと言えると思います。

（注1）寺子屋＝江戸時代の教育施設。

（注2）綿々＝長く続いて絶えないさま。

（齋藤孝「日本人は何を考えてきたのか」より）

1　――線部①～⑥のカタカナは漢字に直し、漢字はその読みをひらがなで書きなさい。

2　[A]に入る語として最も適当なものを選びなさい。

ア　すると　イ　つまり

ウ　しかし　エ　そして

3　――線部(1)「一人で部屋に戻って泣いた」とありますが、その理由を説明した次の文の[　]に入る語句を、本文中から十一字でぬき出しなさい。

＊姿勢を崩した自分を見て、先生は[　]と判断したのだと悟り、恥ずかしさと情けなさを感じたから。

4　[B]に入る語句を、本文中から六字でぬき出しなさい。

5　本文の内容として最も適当なものを選びなさい。

ア　かつての日本では、西洋から伝わった、体を整えることで精神を整えるという伝統をもとに教育が行われた。

イ　古代ギリシャの時代から現代に至るまで、西洋には精神性と身体性が一体のものであるという考えはない。

ウ　寺子屋では、先生の言葉や姿勢を真似する学習を通して、子どもたちに孔子の精神性を学ばせていた。

エ　西洋と東洋の間では、議論に臨む姿勢の違いから生じる、議論する内容の質という面で大きな違いがあった。